

第68回 全国大会 特別セッションレポート

1

第68回 全国大会特別セッションレポート

水田秀行
E28193@jp.ibm.com

日本IBM 東京基礎研究所

2006年3月9日に工学院大学において行われた情報処理学会第68回全国大会特別セッション「サービス・サイエンスの出現」の企画および司会をつとめさせていただいたので、その内容を報告したい。

基調講演“Services Sciences, Management and Engineering (SSME) : A next frontier in education, innovation and economic growth”は本小特集執筆者でもある Jeffrey T. Kreulen (IBM Almaden Research Center) によって行われた。講演では、サービス・サイエンスとはどのようなものであり、今なぜ必要とされているのか、アカデミアや産業界、政府にとっての重要性と課題について述べられた。また、サービス・サイエンティストに必要とされる理工学、社会学、ビジネスに関係する学問領域およびツールについても考察された。詳細は解説記事と重なる部分も多いのでそちらを参照していただきたい。

続いて行われたパネル討論「サービス・サイエンスの確立に向けて」では、丹羽邦彦氏 (科学技術振興機構) の司会により討論が行われた。パネリストは Jeffrey T. Kreulen (IBM)、内丸幸喜氏 (文部科学省)、徳田英幸氏 (慶應義塾大学)、中島秀之氏 (はこだて未来大学)、橋本正洋氏 (経済産業省) の5名である。これまでもサービス・サイエンスについてのシンポジウムにおいてパネル討論が行われてきたが、ビジネススクールやマネジメント (MBA) の視点での議論が中心となっていた。今回は情報処理学会で行われるセッションということもあり、この新しい分野にいかに関係技術をはじめとする学問分野が貢献できるか、大学や行政、学会としての課題は何かということ考えた。限られた時間 (2時間) の討論であるので、サービス自体の定義については議論せず、第3次産業を含む広い範囲を想定してもらい、「サービス・サイエンス」の学問分野とは何か、またそれを発展させるには何をなすべきかをテーマに討論してもらった。

まず、サービス・サイエンスの学問分野というテ-

マで、アカデミア中心の議論を行った。1つの論点としてあがったのは、日本語でいう「サイエンス」は英語の“Science”とはかなりニュアンスが異なり、狭い領域をイメージするが、より広い領域で議論すべき問題であるので「工学」など別の概念で捉えるのが良いのではないかという点である。モノからコトへという言葉もあるが、コト (process) が重要となるサービス・サイエンスは、欧米で生まれたが、主体を含むプロセスは日本の世界観に近い。日本でもより発展する可能性があるとする意見も出た。学問分野としてのS字型の発展カーブを念頭において、サービス・サイエンスはまだ初期の未熟な段階にあり、広くいろいろ試すこと、また、知識の集積だけでなく、実践と評価をあわせたループをまわすことも重要になる。単一discipline型のサイエンスではなく、数学のような基礎科学からシミュレーションや社会、組織の行動分析という人間に近い応用科学まで含めた multi discipline 型の学問を考える必要がある。情報処理学会における討論ということも踏まえて、サービス・サイエンスに必要な学問領域としては、特に情報学と社会学が中心となるというかたちで議論がまとめられた。

もう1つのテーマとして我が国の取り組みについて行政と大学の視点から討論を行った。平成18年度からの第3期科学技術基本計画においても新興・融合領域への対応が課題とされており、総合科学技術会議からもサービス分野における競争力の向上のためのイノベーション促進に必要な人文・社会科学の振興と自然科学との知の統合について意見が述べられている。一方、経済産業省ではサービス産業をさまざまな統計から調査し、日本と他国との比較と課題の抽出を行っているが、現在の標準産業分類は新しいサービス産業の出現や既存産業のサービス化に対応できておらず、国際的にも統一された分類と統計が必要とされている (たとえば収益の半分以上をサービスから得ているIBMはどのように分類されるであろうか)。また、産業の競争力を高めるのが重要であ

るが、サービス産業政策は多岐に渡り、まず業態にあわせて課題を抽出していかなければならない。さらに、サービス・サイエンスの発展によって抽象化した特徴を捉え、抽出された課題に対応する共通のプラットフォームやツール開発の必要性について言及された。こうした状況において、新興・融合領域に対応し、産業の競争力に貢献できる人材を育成することが政府としても重要課題である。大学としても行政と連携し、大学と産業界のミスマッチを解消し、問題発見型人材を育てるとともに、新規分野に挑戦する学生のキャリアプランを明確にすることが大変重要である。

最後に学会としての課題であるが、最近特に情報処理学会と社会や産業界の隔たりが問題視されている。情報社会といわれて久しく、情報技術が社会・経済に多大な影響を及ぼしたとされるニュースを見ない日はない。しかしながら、そこに情報処理学会からの提言も、逆に報道側からの学会への興味も見ることはない。また、産業

界との有効な連携も行われてこなかったため、会員数減少の一因となっている。情報処理学会ITフォーラムは、このような状況に対応すべく、産業界とともに社会の発展に貢献するという理念のもとに2006年に創設された。今回の「サービス・サイエンス」特別セッションもその活動の一環として位置づけられる。パネル討論の最後に技術応用運営委員会の委員長でもある徳田氏より、ITフォーラムにおいて「サービスサイエンスフォーラム」が設立されたことが紹介された。サービス・サイエンスの発展のため、今回のようなセッションを今後も開催するとともに、学术界とサービス実務家の連携の場としてオンラインコミュニティを提供している。本小特集を読み興味を持っていただけたならぜひ下記サイトを訪れてみて欲しい。

<http://itforum.coe21.sfc.keio.ac.jp/>

(平成18年3月31日受付)

